

SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

№ 12
2021.12

楽

善
会

訓盲院



東京盲学校

訓盲院

東京
盲
啞
学
校

東京教育大学
附属盲学校

筑波大学
附属視覚

筑
波
大
学
附
属
盲
学
校



巻頭インタビュー：野呂文行（人間系障害科学域代表）

人間系障害科学域と附属学校、連携推進グループ

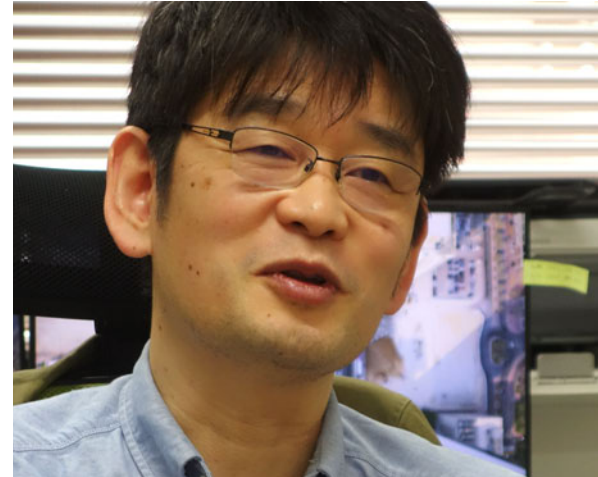
筑波大学人間系障害科学域は、障害科学の基礎から応用に至る広範囲にわたった今回は人間系障害科学域代表の野呂文行先生にご登場いただきました。

先生のご専門分野である応用行動分析学について、教えてください。

応用行動分析学（Applied Behavior Analysis）は、「行動の原因を個人の内部に求めるのではなく、環境側に求める」という考えをしています。目の前の子どもの行動から、「どうしてだろう?」とその行動の原因を分析し、有効な解決方法を導き出していきます。応用行動分析学は、特別な支援を必要とする子どもに対してだけでなく、福祉や医療、組織等、幅広く様々な分野で応用されています。

長年、教育現場の支援に携わってこられたお立場から現場の先生方に何かアドバイスはありますか?

現場の先生方は、それぞれの教育観のもとで一生懸命に指導に携わっておられると思います。子どもたちに確かな成長が感じられるときには、特別な手だては講じる必要はありません。ただ、子どもたちの成長に疑問や悩みを感じられたときには、応用行動分析学という新しい視点を取り入れてみることも良いのではないかと思います。具体的には、「なぜその行動が起きるのか?」と子どもの行動の前後に着目して分析し、解決の方策を考えていきます。支援する側は、子どもの様子を観察しながら行動を境にして生じている「環境」の変化は何だろうと考えていきます。そして、望ましい行動を増やすための工夫を取り入れていきます。



応用行動分析学を知ることで、私達も子どもへの関わりにヒントが得られそうですね。

はい。ただ、子どもの行動を分析する方法を正しく身に付けるためには、知識と技術を適切に学び着実に実施していく必要があります。多くの学校ではケース会議等で子どもの課題を話し合いますが、ときには時間内に解決の方策が定まらないこともあると思います。具体的な指導目標や手だてを考えるためには、子どもの行動を理解するための手が必要が必要です。応用行動分析の枠組みを上手に活用してもらうことで、子どもの情報を教員間でスムーズに共有し、現場の先生方の解決に繋がれば嬉しいです。その際、子どもの問題行動が複数あるとしたら、どこか一つに焦点化して取り組まれると手ごたえを感じられて良いと思います。

今の学生や若い現場の先生方に向けて、エールをいただきたいです。

「あれもこれも」と、様々な分野を少しずつ学びたいという学生に出会うことがあります。それも悪くはありませんが、何か一つ飛びぬけて持つことも必要ではないでしょうか。集中して極めることで、自分の自信にもつながります。その後で、違う分野に少しずつ広げて生かしていければいいと思っています。自分の拠りどころとなるものを見つけてほしいです。

が協働し、特別支援教育の未来を創っていく

最先端の研究を行っています。



特別支援教育連携推進グループに対して、一言お願いします。

人間系障害科学域は、筑波大学の開学以来、障害を中心とする学問の発展や充実に努め、長きにわたり障害科学に関する多様な研究成果を国内外に広く発信してまいりました。特に私達大学教員は、附属特別支援学校、附属学校教育局と密接に連携をとりながら、教育現場での実践的・応用的課題に関する研究を行い着実な成果を上げてきています。今後はこれまでの研究蓄積に甘んじることなく、特別支援教育の現状と課題を見据えながら、大学と附属学校、教育局が一つの大きなファミリーとして協働し新たな成果を生み出していくことが必要だと思います。特別支援教育連携推進グループには互いの組織をつなげるハブとしての役割を期待しています。そして、私達と「SNE-T」を読んでくださっている全国の先生方みなで、一緒に特別支援教育の未来を創っていけたらいいですね。

おわりに

野呂先生は現場で支援に携わるとき、「子どもとともに、担任の先生や学校運営に携わる先生とも連携を図りながら、円滑なコンサルテーションとなるように心がけてきました。」と仰っていました。当事者の子どもだけではなく現場の先生方のことも大切に応援したいという、温かな気持ちがインタビューを通して伝わりました。

静岡県出身で、学生時代はずっとサッカーをやってきたというスポーツマンでもあり、「テレビでサッカー中継を観ていると、つい熱くなって画面に向かって声援を送ってしまいます。」と柔らかい笑顔で話してくれました。指導に悩む現場の先生に、さりげなく寄り添った的確なアドバイスをくださるような、穏やかで優しいお人柄が感じられました。

（聞き手：竹田 恵 / 敬称略）



附属学校実践紹介

附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取り組みがたくさんあります。

子どもたちにとって安心できる人に・・・そこからしか始まらない

～附属久里浜特別支援学校寄宿舎による実践～

附属久里浜特別支援学校は知的障害のある自閉症の幼児児童の学校です。寄宿舎では、今年度小学部の子どもたち5人が、集団生活を送っています。写真は、3年生のS君が5人の仲間を描いた絵で、寄宿舎に飾ってありました。寄宿舎指導員も5人で、シフトを組んで日夜、寄宿舎のために働いています。

今回、「寄宿舎の生活作りで大切にしていることは何ですか」と、5人の指導員の先生に尋ねてみました。

冒頭の言葉は、寄宿舎指導員長の中田明斗先生が、悩みながら答えてくれたものです。6年間一緒に生活を送ったある男の子との関わりを通して、そう思うようになったそうです。その子は、本校幼稚部の課程を修了した後、小学部1年生のとき入舎しました。まだ体は小さく全身を使って泣いたり、



怒ったりしていました。そんなとき、中田先生は、黙ってそっとその子の横にいたり、穏やかな声でなぐさめていたりしていました。そんな光景が思い出されます。そのうちに、中田先生のことを大好きになり、かわいくて高い声で「明斗先生、明斗先生」と呼んで遊ぶようになりました。その男の子は、今年の春、大きく育って、学校を巣立っていきました。中田先生は、その子との関わりを悩んだ日々を通して、子どもたちにとって自分がどんな存在になればいいのかが、分



かるようになってきたそうです。

親元を離れて生活を送っている幼い子どもたちにとって、安心できる人になるということは、とても大変な日々の連続です。子どもたちは「安心しているよ」とは言いません。子どもたちが心から安心だと感じていることを、大人が子どもに真摯に向き合い感じ取ることが難しく大変なのだと思います。

寄宿舎指導員として21年間、子どもたちと関わっている瀧口智子先生も、悩みながら教えてくださいました。「愛情深くかかわること、生活の文脈的なものを大事にすること。帰ってきたら、服を洗濯



に出す、靴が濡れたら洗う、それから、気持ちの調整を支えることかな。子どもに信頼されること、そのためには約束は守って、一緒に完結するようにしています。」子どもたちは、いらいらしてもうまく伝えられなかったり、寂しい気持ちがあふれてしまうのか、楽しんでいたはずなのに、急に泣き出したりすることもあります。どの先生も、子どもの気持ちに寄り添ったり、励ましたりしながら、子どもたちの生活を支えています。

小菅夏美先生は、「社会に出て過ごせるように、いけないことはいけない、やることはやる、例えば、食べられなかった物が食べられるようになる、そうやって生活が広がっていくことが大切だと思います。ちょっと子どもに厳しいかな・・・」とおっしゃり、次の日に、「スキンシップを大事にして、目や表情をよく見て子どもの状態をよく知ることが前提ですよ。」と付け加えにられました。優しさと厳しさと、両方兼ね備えていることが大切ですが、そのバランスの難しさに、これでよいのかと常に自問自答しながら、日々過ごされていることが伝わってきました。

松浦太一先生は、「とことん運動遊びをすることや日常生活の中で体を動かす経験を大切にしています。」とおっしゃっていました。この日も子どもと共に元気に走っていました。子どもの心と体を育てていくこともまた大切なことです。

山崎真美先生は、指導員になられて2年目です。「愛情をたっぷり注いであげたい。常に笑顔で子どもたちのありのままを受け止めたい。」と答えられました。

5人の先生とも、ずいぶん悩んで返答していただきました。毎日の生活の中で当たり前だと思っているたくさんの方のことがどれも大切で、改めて表現するのが難しかったそうです。

* * * * *

最後に、少し前に高校生になった卒業生と、寄宿舎の先生が話をする機会がありました。その男の子が、「ぼく、(寄宿舎で生活している頃)〇〇君のズボンを間違っちはいちゃったね。おもしろかったね。」と何度も笑顔で話していました。日常の些細な出来事が、大きくなって子どもの心の中で輝き続けている、これからもそんな寄宿舎生活をつくってほしいと思います。

(聞き手：高尾政代／敬称略)



松浦太一先生 中田明斗先生
瀧口智子先生 小菅夏美先生 山崎真美先生

令和3年度免許法認定公開講座 (障害児の心理・生理・病理・教育課程・指導法論) 報告

令和3年8月24日(火)～8月27日(金)に標記講座を開催しました。本講座では特別支援学校教諭免許状の各領域における一種、二種免許状を取得するために必要な質の高い講座を提供することを目的としています。

例年は対面型の開催で、全国から大勢の現職教員が参加されます。しかし昨年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催ができませんでした。今年度も感染拡大の懸念はぬぐえず、規模を縮小した上で初のオンライン開講に踏み切りました。



今回の受講者(62名)の中では通常の学校で勤務されている方が最も多く、「特別支援教育について大変勉強になった」「実践に活かすことを想定して講義していただきとてもわかりやすかった」などの声が多く寄せられました。講師の先生方には心より御礼申し上げます。

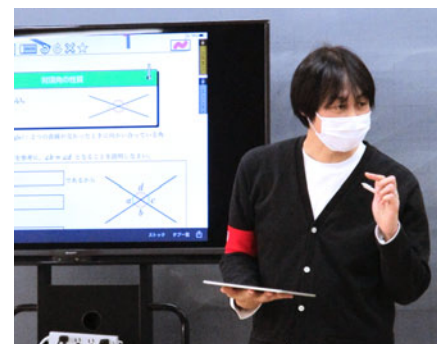
来年度の実施方法や規模等については、感染症の状況をふまえて最終的な判断をいたします。全国の免許状取得予定の先生方には筑波大学のHP等の情報をご確認いただき、来年度は多くの方に受講いただければと思います。

令和3年度 現職教員研修(指導力向上コース)について

令和3年度の短期現職教員研修(指導力向上コース)に渋谷悟先生(青森県立青森第一高等養護学校教諭)と、山本千秋先生(埼玉県立川島ひばりが丘特別支援学校教諭)の2名をお迎えしました。おふたりは、当グループで特別支援教育全般に関する講義や演習を受講した後、附属桐が丘特別支援学校(肢体不自由)で実践実習に臨みました。

渋谷先生は「特別支援学校におけるタブレット端末の活用について」という研修テーマで3週間、附属桐が丘特別支援学校で実践実習を行いました。実習では、中学部2年生の数学の授業でタブレットを活用した取組をしました。生徒たちもモニターを見ながら「新しいやり方がある。」と自分で気づき、それぞれに思考を深める姿がみられました。渋谷先生は、「教員と生徒が自分のタブレットを操作しながら授業を行うやり方は初めてだったので、とても良い経験となりました。得られた成果を、研修後に生かしたいです。」と仰っていました。

当グループの現職教員研修事業の様子は、ホームページでも随時公開しておりますので、ご覧ください。



日本特殊教育学会 第59回大会について

令和3年度日本特殊教育学会 第59回大会において、当グループは「筑波大学附属特別支援学校の教材・指導法データベース」について、教育講演にて発表させていただきました。

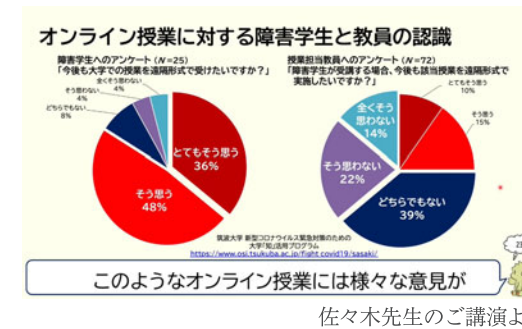
講演では、当グループの概要の紹介、データベースの活用について、データベースの教材の活用として筑波大学附属桐が丘特別支援学校の「透明地図シート」や筑波大学附属大塚特別支援学校の「くねくねマラカスフォーマット」を一例として紹介しました。

また、他障害種の活用の可能性として、①筑波大学附属視覚特別支援学校と筑波大学附属桐が丘特別支援学校で活用されている「(黒い)書見台」の活用の実態と、視覚障害教育の知見が肢体不自由児の「視覚情報処理」の困難への手立てとして有効である気づきを得られたこと、②筑波大学附属桐が丘特別支援学校の「マイシク」を他障害種の学校での授業実践で活用できることなど、これまで検証してきた成果についてお伝えしました。

当グループでは、教材・指導法データベースの他障害種での汎用性とインクルーシブ教育システムにおいて様々な学校でご活用いただけるデータベースとして、今後も広く発信していきたいと考えています。



令和3年度 特別支援教育研究セミナーについて



令和3年度筑波大学人間系インクルーシブ教育システム開発リサーチユニットと当グループ共催の「特別支援教育研究セミナー」は、初の試みとして2か月間(11月1日～12月31日)のオンデマンド配信として開催しました。

今回のテーマは「インクルーシブ教育システム下における初等中等教育・高等教育での実践」。「身近なことからできるインクルーシブ教育システムの整備」のテーマで、筑波大学附属視覚特別支援

学校長の星祐子先生から、インクルーシブ教育システムの構築のために、各地域や園・学校がそれぞれの実情や特色等に応じて取り組んだ実例についてご紹介いただきました。高等教育での実践としては、「インクルーシブな高等教育環境の構築」のテーマで、筑波大学人間系障害科学域の佐々木銀河先生には、コロナ禍における高等教育での障害学生に対する合理的配慮、発達障害の有無を問わない教育環境の構築についてご講演いただきました。その他にも、附属特別支援学校5校から各学校での実践発表もありました。

例年とは異なる形でしたが、オンデマンドにより「期間中いつでも、何度でも」視聴できることにより、全国から600名を超える教職員、学生の皆様にご参加いただきました。

editorial Postscript

編 集 後 記

本号の取材では筑波大学に足を運び、対面でのインタビューを行いました。生活の中にオンラインが浸透し、私たちは利便性を享受していますが、今回は直接お会いし、野呂先生のお人柄をより深く知ることが出来て、改めて対面の大切さを実感しています。本年度は様々なグループの事業をオンラインで実施することで、全国の多くの先生方とつながることができた点をとても嬉しく思っていますが、画面上の皆様と今後直接お会いできる機会も楽しみにしています。年内の教育活動がまとめを迎える時期ですので、先生方もお健やかに過ごしてください。 (竹田 恵)

本号表紙の撮影で附属視覚特別支援学校にお伺いしました。表紙の2体の胸像は附属視覚の構内にあるものです。1体目は石川倉次先生。石川先生はフランスのプライユが考案した6点点字を基に日本語に翻案し、今日の日本語点字の基礎を築き、「日本語点字の父」と呼ばれる方です。附属視覚の前身である東京盲啞学校に教諭として長きに渡り在職されていました。2体目は町田則文先生。町田先生は東京盲啞学校が盲啞分離により東京盲学校になり、現在の地（文京区目白台）に設立された時の初代校長先生です。町田先生は石川先生と一緒に点字の表記法を協議したり、石川先生が執筆された「日本訓盲点字説明」の出版にもご尽力されたりしたそうです。附属視覚では、長い視覚障害教育の歴史の一端に触れることができます。附属視覚をご訪問の際は、是非この2体の胸像を探してみてください。 (厚谷秀宏)



SNE-T

Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

エスネット12号(通巻 第60号)2021年12月24日 発行
発行 / 編集 : 筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
電話 : 03-3942-6923・6937 FAX : 03-3942-6938
e-mail : snerc@human.tsukuba.ac.jp
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/>

©2021 筑波大学特別支援教育連携推進グループ(本誌記事の無断転載を禁じます)